

例えば、卵子提供による家族形成について⑩

～家族をひらく～

荒木晃子

家族のいろいろ

D 夫: 僕たちは、結婚して自然に二人の子どもを授かった。よくよく考えると、これって、とても幸運なことなんだね。

D 子: え? 突然どうしたの?

D 夫: うん・・・実はね、君が卵子を提供したって言いだして以降、新聞や報道、生殖医療に関するネット情報にやたらアンテナを立てるうち、自分なりに家族について色々考えるようになったんだ。例えば、もし君に卵子がなかったら僕たちはどうしていたのか。もし僕に精子がなかったら、とか、いろいろ。
D 子: そうなのね。それって、私たちが今まで考えなくて済んでいただけで、本当はとても大切な家族の問題だったのかもしれないわね。それに、将来、子どもたちにもその可能性がないわけではないし・・・これまで考える必要がなかったということは、ある意味、幸運といえるのかもしれない。でも今は、生まれつき卵子のない女性の存在を知り、自分の卵子を提供することを真剣に考え始めてみて、本当は他人事ではない気がしてきた。もしかすると、私の卵子がなかったり、あなたに精子がなかったりして、私たちが悩んでいたのかもしれないし、将来、二人の子どもたちが直面する可能性も否定できない。生まれながらに卵子や子宮のない女性もいれ

ば、中には、若くして卵子や子宮を失う女性もいると聞いている。がんや病気、交通事故やアクシデントで、いつ自分自身がその当事者になるかも知れない。そう考えると、誰もが自分や子どもたちのため真剣に、社会でどうサポートする/できるのかを考えなければならない問題のような気がする。

D 夫: 僕もまったく同じことを考えていた。つい先日、いま日本には卵子提供や精子提供、そして代理出産に関する法律がないことは伝えたよね?(D 子: ええ。)法律がないってことは、言い換えれば、無法地帯ってことだよ。確かに、生殖医療施設にはそれなりのルールやガイドラインがあるのかもしれないけれど、それは、あくまでも医療現場の規制でしかない。だから、医療技術ありきの妊娠には、不妊治療が前提という条件付きで、子どもをつくることになる。ということは、医療施設がそれを「する」といえば、子どもを授かる可能性が生まれるし、反対に、施設から「できない」といわれれば、あきらめざるを得ないということになる。実際に、患者から、こういう治療があるからやってほしいとは言えないからね。

D 子: 確かにそうだけど・・・でも日本では、精子提供だって、第二次世界大戦終結の数年後からずっと継続して実施されてきたとい

うし、最近では、卵子提供を実施する医療機関もある。すでに、国内でも代理出産で生まれた子どもも存在するし、今でもそういった生殖医療技術を必要とする当事者たちがいなくなったわけではないはず。そうやって過去に、数万人という子どもたちが誕生した事実があるのに、なぜ法律で認められないのかしら？なんだか合点がいかないわ。

D 夫:まったくその通りだね。素人の僕たちが考えても納得がいかないってことは、今まさに、その問題に直面している人たちにとっては、法律や医療、そして社会から、自分たちが子どもを持つことを拒絶されているように感じるかもしれないね。ちょっと極端な意見かもしれないけれど、当事者の立場にたち、自分の問題として考えてみると、そんな気がしてくる。万が一、物心つく年齢で自分が当事者であることが分かれば、なおさらだろう。自分には子どもが産めない/産ませられないと分かれば、それはそれは傷つくだろうしね。恋愛や結婚にも影響するかもしれないし、人生観が変わるかもしれない。それほど大きなショックを受けるんじゃないかな、僕ならば・・・だけだね。

家族になれるのは生まれた後から？

D 子: そうなの！私も同じことを考えた。もし自分だったら、もしそれが我が子だったら、って。でね、卵子を提供したいって思ったの。もちろん、養子を迎える選択肢があるのは知ってるし、最近では、新生児委託といって、生まれたばかり/生まれて間もない赤ちゃんを、不妊カップルが育てるケースもあるらしい。TVの特集で見た養育家族は、両親も子どもたちも、とても幸せそうだった。面会交流の場面では、その子を産んだ女性も、その

子を育てている両親も、互いに感謝し合っていた。家族って、皆が家族になろうと思えば、なれるものなんだって思った。だって、家族は血のつながりだけじゃないでしょう？私たちもそうだけれど、夫婦は、もともとは他人。お互いの意思で家族になったんだもの。だから、血のつながらない子どもとだって、家族になれるはず。親がその子を家族として迎え入れ、愛しみつつ一つ屋根の下で共に暮らし家族になる。そもそも、あなたと私だって、お互いが自分の好きなように勝手気ままに暮らしていても、夫婦でいられるわけじゃない。家族って、それなりに、皆が少しずつ頑張って(家族に)なっていくものだと思うのよね。そう考えると、卵子提供は卵子を養子に出すこと、っていう考え方は、そう難しくはないと思う。確かに、自分が産んだ子どもを養子に出す女性には余程の事情があると思う。でも、その子を養子に迎えるどの家庭でも、その子が幸せに育ってくれることを願い家族として迎え入れるはずよね？その点は同じではないのかしら。もちろん、生まれた子どもを迎えることと、卵子や精子を(養子として)迎えることが同じとは言えないかもしれないけれど、卵子/精子を縁組し、自分で産み育てる、と考えることができれば、複雑な生殖医療技術は、親子縁組のための社会的手続きの一つとして捉えることができないかしら。

D 夫: 卵子の養子縁組ね・・・。そうとう斬新な考え方だね！

D 子: そう・・・かな。だって、産んではみだけれど、様々な事情で実際に育てられない人たちがいる。養子縁組ってそこから始まった子どもたちのための制度。子どもって、産まれたらみんな幸せになれるわけではない。

誰が/どこで/どう育てるかで、その子の人生が大きく変わるんだと思う。そう考えると、例え提供卵子で妊娠しても、その子は生まれる前から、その子の誕生を心待ちにするカップルに迎えられる。もしかすると、世界中の誰よりもその子の誕生を心待ちにしていたカップルに、よ！これって、子どもが幸せになる条件を満たしてるって、思わない？

子どもの幸せを願う

D 夫: なんだか変に説得力があるね。でも僕が言いたいのは、レシピエントと同じように、子どもが幸せになる前提で卵子を提供したいと考えるドナー、つまり君のことだよ。

D 子: あら、ごめんなさい！私ったら、生まれてくる子どもや、提供を受けるレシピエントカップルが幸せになることばかりを考えていて、提供するドナーのことは、あまり深く考えたことはなかった気がする。ふふ…笑っちゃうわね、今回ばかりは「自分のこと」なのに！

D 夫: やはり、そうか。いろんな情報を集めてみても、提供を受ける側と生まれた子どもについては医学的な側面から、様々な課題や意見、さらには研究結果などが提示されているように感じた。特に、生まれてくる子どもの出自を知る権利については、子どもの福祉の視点で、とても重要だとされている。かつて、精子提供で生まれた子どもの権利など、まったく関心がなかった医療者たちも、今では、子どもの権利について、その重要性を認める方向に変わったしね。でも、提供するドナーに関しては、「ドナーになる条件」のガイドラインはあるものの、そのサポートや保障に関しての情報は全くといっていいほど見当たらない。だから、生まれてくる子どもの幸せや、レシピエントカップルに寄せ

る君の思いを聞いたときに、僕は複雑な気持ちになる。何故か理不尽な気がするんだ。リスクを承知でドナーになろうとする善意の行為が、このままでは、単に不妊治療の患者として卵子を取り出し、その後は君の個人情報と一緒に、僕や二人の子どもたちの個人情報までもが、一般人が勤務するような個人医療機関に数十年も保管される、って事実がどうしても納得できない。僕たち家族の情報を、信頼関係も成立していない医療施設で管理されるってことがね。

D 子: 確かに…あなたの言うとおりでわ。もし私が卵子提供ドナーになるとしたら、検査する病院選びから、誰に提供するのか、そして、提供した後もずっと、一切何も選択の余地は与えられていない。色んな検査をした結果、果たして選ばれるのか否か、いつ採卵するのもわからない。唯一権利として認められるのは、「いつでも辞退できる」ということだけだった。

D 夫: 僕には、そのあたりも理不尽に感じる点の一つなんだ。善意を称賛される必要はないけれど、提供というリスクを伴う医療行為には、少なくとも社会的/身体的保障は必要だよ。ドナーなしには成り立たない医療行為に、ドナーにだけ、なにも保障されないことが、家族として納得できない。それに、生まれた子どもの権利を保障するならば、ドナーの子どもの権利も保障するべきだよ。提供卵子で生まれた子どもにだけ、特別な権利があるなんて、不公平だとは思わないかい？子どもだけじゃない、レシピエントだって、ドナーだって、少なくとも身体的保障と平等の権利は与えられるべき、というより、これは本来、全ての国民が持つ権利だと思う。

<次号へ続く>